FDガイド第4号

シラバスとは？

鹿児島大学 FD 委員会 FD ガイド WG

【発行／2013年1月】

全ての授業科目でシラバスを作成している学部を持つ大学は 705 大学（約 96%）、同様の大学院研究科を持つ大学は 579 大学（約 97%）（平成 21 年度文部科学省調べ）と報告されているように、現代の大学では教育活動を行うにあたって、シラバスの作成が半ば当たり前の作業になっています。鹿児島大学でも各授業におけるシラバスの作成は、既に 10 年以上行っており、作業自体は教職員の皆さんにもよく知られているかと思います。一方で、シラバスの役割を熟知し、教育活動を行う上で学生や教職員に上手く活用されているかといえば、いかがでしょうか？

本ガイドでは、知っているようで知らない、理解しているようで説明できない「シラバス」を取り上げ、役割、意義とその効果について再考します。

語源

もともとはギリシャ語 sillybos（文書の内容、目次）に由来、日本では明治時代、「教授要目」と訳され使用されていた記録があります。英和辞典（大修館ジーニアス英和辞典）では、「講義などの摘要、概要、要旨、教授細目、時間割、学生要覧」などと訳されています。

シラバスの役割

1. 授業内容を関係者で共有するためのもの

シラバスは、学生が授業内や授業外で学修を行うための指針を示すものです。また教員は、この指針に従って授業を行うことになります。

2. 学生と教員との授業に関する契約書

授業計画を学生と教員との間で共有する、授業に関する「契約書」に近い位置づけのものです。また広い意味では、高等教育機関としての社会に対する説明責任に応えるものになります。

3. 授業に関する諸ルールを示す事務的な連絡文書

実際に授業が行われるにあたって、学生や教員があらかじめ準備したり、従うべき事項等を共有する文書となります。

4. 学生の授業時間外学修を促す指導書

授業で行われる内容があらかじめ記載されていますので、学生は授業に臨む際に前もって準備を行うことができますし、記載されている評価方法に向けての学修などを行うこともできます。

5. 教員の授業改善に向けた資料

シラバスを作成する過程で、教員が自らの行う授業の内容、評価方法などの具体的構造を見直すことができ、自分の授業を見直す良い機会になります。

シラバスとは？

対象別の意義や効果

1 学生にとって

- ☑ 授業の全体像をイメージしやすくなる
- ☑ 授業の目標や内容が確認できる
- ☑ 能動的な授業参加がしやすくなる
- ☑ 予習復習がしやすくなる

2 教員にとって

- ☑ 毎回の授業計画が行いやすくなる
- ☑ 安心して授業に臨むことができる
- ☑ 授業改善につながる
- ☑ 教育活動の成果を共有できる

3 職員、組織にとって

- ☑ 教育支援が行いやすくなる
- ☑ 開かれた組織づくりを推進できる
- ☑ 組織の説明責任を果たすことができる

4 社会にとって

- ☑ 大学内の教育活動が理解しやすくなる
- ☑ 大学との対話が円滑になる

このように、シラバスには多くの役割があり、また多様な読み手が想定されている上、それぞれにとっても多くの意義や効果があることがわかります。自らの授業においてシラバスを作成する際には、これらのことに注意を払いながら、広い視野を持って作成する必要があります。

参考文献

夏目 達也　他（2009）「大学教育準備講座」　玉川大学出版部

苅谷 剛彦　（2012）「アメリカの大学・日本の大学」　中公新書ラクレ

【鹿児島大学FD委員会FDガイドWG】

田口　則宏（歯学部委員）　山本　啓司（理学部委員）　松尾　智英（共同獣医学部委員）

金坂　弥起（臨床心理学研究科委員）　中島あや子（教育センター副センター長・法文学部）　伊藤奈賀子（教育センター）